

テオソフィア

T H E O S O P H I A

w i n t e r

T O P I C S

年末年始特集 HPB文集より

新時代の共同体 1926 ⑥

シークレット・ドクトリンII 人間生成論 ⑪

神智学協会のお知らせ

- 2025 年5月より新年度となります。会員を継続される方は年会費のお手続きをお願いいたします。詳細はメールか別紙にてご案内いたします。
- 勉強会はオンラインで行っております。開催の日時などはメールでご案内します。メールアドレスが送信エラーになる方がいらっしゃいますので、勉強会のお知らせなどが届いていない会員の方がおりましたら、info@theosophy.jp までご連絡ください。
- 会報誌の発行は年4回となります。発送月は7月、10月、1月、4月となります。
- アグニヨガシリーズ『モリヤの庭の葉Ⅱ(光明)』『新時代の共同体』が出版されました。Amazon で購入可。
- 日本発の「人々の寺院」は勉強会グループを神智学協会内でおこなっております。アグニヨガと合わせて、霊的探求をしましょう。お待ちしております。

書籍のご案内



テオソフィア

冬号 vol.77

神智学協会日本ロジジ会報誌

年末年始特集 HPB文集より	1
シークレット・ドクトリンⅡ 人間生成論 ①	10
新時代の共同体 1926 ⑥	16

年末年始特集 HPB文集より

H・P・ブラヴァツキー 著 星野 未来 訳

昔のクリスマスと今のクリスマス

[神智学雑誌、第1巻第3号、1879年12月、58-59ページ]

私たちは今、キリスト教世界全体がその最も重要で有名な祭典——すなわちその宗教の創始者の誕生——を祝う準備を始める季節に差ししかかろうとしている。本紙が西洋の読者のもとに届く頃には、どの家庭にも祝祭と喜びがあふれていることだろう。北西ヨーロッパやアメリカでは、ヒイラギやツタが家々を飾り、教会は常緑樹で美しく装飾される。これは、古代の異教徒ドルイドの風習に由来し、「森の精霊たちが常緑樹に集まり、より温暖な季節が来るまで霜に傷つけられずに過ごせるように」と願ったものである。ローマ・カトリック諸国では、「クリスマス・イブ」の夜を通して多くの人々が教会に集い、神の御子と「天の女王」の衣をまとった聖母マリアの蠟人形に礼拝を捧げる。分析的な目で見ると、金やレース、真珠で刺繍されたサテンやベルベット、宝石で飾られたゆりかごといった華やかな装飾は、むしろ矛盾しているように思われる。というのも、福音書の記述を信じるならば、将来の「救い主」は、より良い宿がなかったため、ユダヤの田舎の宿屋の貧しく虫食いだらけで汚れた飼葉桶に寝かされたのだった。このことを思うと、素朴な信者の眩んだ目の前では、ベツレヘムの馬小屋の姿はすっかり消え去ってしまっているのではないかと疑わざるを得ない。控えめに言っても、この派手な飾りつけは、「頭を置く場所さえなかった」と語った「人の子」の民主的精神や、富に対する真に神聖な軽蔑とは相容れない。そのため、一般的なキリスト教徒にとって、「金持ちが天国に入るよりも、ラクダが針の穴を通る方が易

しい」という明確な言葉を、単なる修辭的な脅し以上のものとして受け止めるのは、ますます難しくなっている。ローマ教会は賢明にも、信徒が自分で福音書を読んだり解釈したりすることを厳しく禁じ、できる限りラテン語で聖書の真理を伝え続けてきた。それはまさに「荒野で叫ぶ者の声」である。この点で、教会は古代アリア人の叡智——「その子孫によって正当化される」叡智——に従ったのだ。現代のヒンドゥー教徒がサンスクリット語を、現代のパールシー教徒がゼンド語を一音節も理解しないのと同じように、普通のローマ・カトリック信者にとってラテン語は象形文字と変わらない。その結果、バラモン教の大祭司、ゾロアスター教のモベド、ローマ・カトリックの教皇はいずれも、それぞれの教会の利益のために、自らの想像力の深みから新たな宗教的教義を生み出す無限の機会を与えられている。

この偉大な日を迎えるため、イングランド全土やヨーロッパ大陸各地では、真夜中になると鐘が陽気に鳴り響く。フランスやイタリアでは、華やかに飾られた教会でミサが執り行われた後、「祝宴の参加者たちは夜通しの疲れに耐えられるよう、軽食（レヴェイヨン）を取るのが通例である」と、カトリック教会の儀式について記した書物は述べている。このキリスト教の断食の夜は、ヒンドゥー暦 11 月に行われる、シヴァ神の信者たちのシヴァラートリ——暗闇と断食の大いなる日——を思い起こさせる。ただし、後者の場合は、長い徹夜の前後に厳格な断食が課されており、彼らにはレヴェイヨンや妥協は一切ない。もともと、彼らは「邪悪な異教徒」にすぎないのだから、救いへの道は十倍も困難でなければならないのだ。

現在ではキリスト教諸国でイエスの誕生を記念する日として広く祝われている 12 月 25 日だが、もともとこの

日がそのように認められていたわけではない。初期のキリスト教において、クリスマスは祝日として最も日付の定まらないものであり、公現祭と混同されて、しばしば4月や5月に祝われていた。世俗史にも教会史にも、その日付を特定する確かな記録や証拠は存在しなかったため、長らくクリスマスの日取りは各自の判断に委ねられていた。4世紀になってようやく、エルサレムのキュロス（キリル）に促されて、教皇ユリウス1世が司教たちに調査を命じ、キリスト降誕の日付について最終的な合意を得よう指示した。こうして選ばれたのが12月25日だったが、この選択は後に非常に不運なものだったと判明した。最初にこの「誕生記念日」に異議を唱えたのはデュピユイで、続いてヴォルネーがこれに加わった。彼らは、非常に明確な天文学的データに基づき、紀元前のはるか昔から、ほぼすべての古代民族がまさにこの日に太陽神の誕生を祝っていたことを証明したのである。「デュピユイは、聖母子の天上のしるしはキリスト誕生の数千年前から存在していたと述べている」とヒギンズは『アナカリプシス』で記している*。デュピユイ、ヴォルネー、ヒギンズはみな異端者、キリスト教の敵として後世に伝えられているが、この点については「中世が生んだ最も博識な人物」とされるレーゲンスブルク（ラティスボーン）のキリスト教司教、ドミニコ会のアルベルトゥス・マグヌスの言葉を引用しておこう。彼は「私たちが主イエス・キリストの誕生と定める瞬間に、天の処女のしるしが地平線上に昇る」と述べている†。したがって、アドニス、バックス、オシリス、アポロンらは皆、12月25日に生まれたとされているのである。クリスマスはちょうど冬至の時期にあたり、この時期は一年で最も日が短く、地上はかつてないほど闇に包まれる。すべての太陽神は毎年この時期に生まれると信じられていた。なぜなら、この時期から太陽の光が日ごとに闇を追い払い、太陽の力が増し始めるからだ。

* [第1巻、313ページ]

† [この一節はゴドフリー・ヒギンズの『アナカリプシス』

第1巻314頁からの引用であり、彼はこの言葉をアルベルトゥス・マグヌスに帰し、「Lib. de Univers.」を参考文献としている。—編者]

いずれにせよ、キリスト教徒たちがほぼ十五世紀にわたって行ってきたクリスマスの祝祭は、きわめて異教的な性格を帯びていた。むしろ、現代の教会の儀式でさえ、オシリスやホルス、アポロンやバックスを讃えるエジプトやギリシャの秘儀をほとんどそのまま模倣したものだという非難を免れるのは難しいだろう。イシスもケレスも「聖なる処女」と呼ばれ、神聖な幼子はあらゆる「異教」の宗教に見いだすことができる。これから「メリークリスマス」の二つの姿を描いてみよう。一つは「古き良き時代」の姿、もう一つは現代のキリスト教礼拝のあり方である。クリスマスが祝日として定められた当初から、この日は神聖な記念日であると同時に、最も陽気な祭りの日でもあった。信仰と狂おしいほどの歓喜が等しく捧げられていたのである。「クリスマスシーズンの祝祭には、いわゆる愚者の祭やロバの祭といったグロテスクなサトゥルナリアが含まれていた。これらは『十二月の自由』と呼ばれ、あらゆる真面目な事柄が滑稽にされ、社会の秩序が逆転し、礼儀や常識が嘲笑されたのだ」と、ある古い年代記の編者は述べている。中世には、奇抜な仮面と風変わりな衣装を身に着けた人々による幻想的な神秘劇が催され、祝祭が彩られた。その劇はたいいてい、揺りかごの中の幼子を、聖母マリアや聖ヨセフ、雄牛の頭、天使たち、東方の三賢者（古代のモベドたち）、そしてさまざまな装飾品が取り囲む場面を描いていた。クリスマスにキャロルと呼ばれる賛美歌を歌う習慣は、キリスト降誕の際に羊飼いたちが歌った歌を思い起こすためのものであった。「司教や聖職者たちもしばしば民衆とともにキャロルを歌い、歌は踊りやタンブリン、ギター、バイオリン、オルガンの音色で賑やかに盛り上がった……。」さらに、現代に至るまで、クリスマス前の数日間、南ロシアやポーランド、ガリツィアでは、操り人形や人形劇を用いてこのような神秘劇が「コリャドフキ」とし

て上演されている。イタリアでは、カラブリアの楽師たちが山からナポリやローマに下り、聖母マリアの聖堂に集まって、熱狂的な音楽で聖母を讃えている。

イングランドでは、祝祭はクリスマス・イブに始まり、しばしばキャンドルマス（聖燭祭、2月2日）まで続いた。特に十二夜（1月6日）までは毎日が休日とされていた。大貴族の館では「無秩序の領主」や「無分別な修道院長」と呼ばれる者が任命され、道化役として宴を盛り上げる役目を担った。食料庫には、雄鶏、雌鶏、七面鳥、ガチョウ、アヒル、牛肉、羊肉、豚肉、パイ、プディング、ナッツ、プラム、砂糖、蜂蜜などが豊富に用意されていた。……「大きな薪をくべて燃やす暖炉の火、特に【ユール・ログ】または【クリスマス・ブロック】と呼ばれる丸太が主役で、これはキャンドルマス（聖燭祭）の前夜まで燃やし続けられ、寒さをしのいだ。こうした豊かさは、領主の借家人や使用人たちとも分かち合われ、音楽や手品、なぞなど、ホットコックル（手遊び）、愚者の耕作（フルプラウ ふざけた耕作遊び）、スナップドラゴン（火を使った遊び）、冗談や笑い、機知に富んだやりとり、罰ゲーム、そして踊りなど、さまざまな遊びや歓談が繰り広げられた。」

現代においては、司教や聖職者たちはもはや民衆とともに公然とキャロルを歌い踊ることはなく、「愚か者とロバ」の祝宴も、危険で何事も見逃さない記者たちの目の前ではなく、神聖な非公開の場所で行われるようになっていく。それでも、飲食を伴う祝祭はキリスト教世界全体で今なお続いており、クリスマスやイースターの休暇中には、他のどの時期よりも暴飲暴食や不節制による突然死が多く起きているのは間違いない。しかし、キリスト教の礼拝は年々、ますます偽りの見せかけとなっている。この口先だけの信仰の冷たさはこれまで幾度となく非難されてきたが、昨年クリスマス頃、ニューヨーク・ヘラルド紙に掲載された魅力的な夢物語ほど、心に迫るリアリズムをもって描かれたことはなかつただろう。ある老人が公の集会で議長を務め、前夜に見た幻について語る機会を得たいと述べたのである。

……その老人は、自分がこれまでに見た中で最も華麗で壮麗な大聖堂の説教壇に立っていると思った。目の前には教会の司祭か牧師が立ち、その傍らには板と鉛筆を

手にした天使がいた。その天使の使命は、彼の目の前で
行われ、神の玉座に受け入れられる捧げものとして昇っ
ていく、あらゆる礼拝や祈りの行為を記録することだっ
た。すべての席は、豪華な衣装に身を包んだ男女の礼拝
者で埋め尽くされていた。彼の心を奪うほど荘厳な音楽
が空間を旋律で満たしていた。才能ある牧師による比類
なき雄弁な説教を含め、すべての美しい儀式的な礼拝が
次々に行われたが、それでも天使は板に何一つ記録しな
かった。やがて、牧師が長く美しい祈りと言葉で会衆を
解散させ、祝福の祈りが捧げられたが、それでも天使は
何のしるしも示さなかった。

…天使に導かれながら、語り手は、華やかな衣装に身
を包んだ会衆の後ろから教会の扉を出た。縁石のそばの
溝には、貧しくぼろをまとった女が立ち、青白くやせ細っ
た手を差し出して、黙って施しを乞うていた。教会から
出てきた裕福な信者たちが彼女の前を通り過ぎると、彼
らは貧しいマグダラのマリアのようなその女性を避け、
婦人たちは自分たちの絹や宝石で飾られた衣服が彼女に
触れて汚れることを恐れて、そっと衣を脇に寄せた。

…ちょうどその時、酔った水夫が向かい側の歩道をふ
らふらと歩いてきた。彼は見捨てられた哀れな少女の前
に来ると、よろめきながら道を渡り、ポケットから数枚
のペニー硬貨を取り出して彼女の手に押し込み、「ほら、
可哀想な見捨てられた女よ、これを受け取れ！」と声を
かけた。その瞬間、記録の天使の顔は天上の光に照らさ
れ、天使はすぐにこの水夫の同情と慈善の行いを石板に
記し、それを神への尊い捧げものとして携えて去って
いった。

これは、聖書にある姦淫の罪で捕らえられた女の裁きの
物語を凝縮したものと言えるかもしれない。確かにそ
うかもしれないが、同時に、私たちのキリスト教社会の
現実を見事に描き出している。

伝承によれば、クリスマスイブの夜には牛たちが祈り
を捧げるようにひざまずくという。また「グラストンベ
リー修道院の墓地には有名なサンザシの木があり、毎年
12月24日に芽を出し、25日に花を咲かせた」とも伝
えられている。クリスマスの日付が教会の父たちによつ
て任意に選ばれ、しかも暦が旧暦から新暦へと変わった
ことを考えると、動物や植物に見られるこの不思議な洞

察力には驚かされる。さらに、ウプサラの大司教オラウスが伝える教会の伝説によれば、クリスマスの祭りの時期になると「寒い北国に住む男たちは、突然不思議なことに狼に変身し、巨大な群れとなって定められた場所に集まり、人間に激しく襲いかかる。そのため、人々は本物の狼よりも、彼らの攻撃に苦しめられる」という。^{*} 比喩的に言えば、これは現代の人々、特にキリスト教国において、かつてないほど当てはまる現象のように思える。特に戦時下においては、クリスマスイブを待たずとも、国全体が「野獣」へと変貌する光景を目にすることができるのだ。

^{*}[オラウス・マグヌス『ゴート族、スウェーデン族、ヴァンダル族およびその他の北方諸国の簡明な歴史』(ラテン語原典より翻訳、ロンドン、1653年)——編者注]

年は終わった、新しい年よ、万歳！^{*}

1888年12月と1889年1月

[ルシファー 第3巻 第17号 1889年1月 353-359頁]

(^{*} 訳注：タイトルの「THE YEAR IS DEAD, LONG LIVE THE YEAR!」の「Long live the year!」は「新しい年よ、万歳!」と訳すことで、英語の「王は死んだ、王万歳!」(The king is dead, long live the king!)のニュアンスを活かしています。このフレーズは、王が亡くなった直後に新しい王が即位することを宣言するための伝統的な表現で、王位の継承が途切れなく続くことを示しています。元々はフランス語の「Le roi est mort, vive le roi!」が起源で、英語でも広く知られています。この表現は、あるものが終わっても新しいものがすぐに始まる、という意味でも比喩的に使われることがあります。今回のタイトル「THE YEAR IS DEAD, LONG LIVE THE YEAR!」も、その有名な言い回しをもじって使われていると考えられます。)

ルシファー誌は、友人および購読者の皆さまに季節のご挨拶を申し上げ、新年の幸福と、同じく多くの幸せが繰り返訪れることをお祈りする。1888年1月号において、ルシファー誌は次のように述べている。「……年の始まりに重要性を見出すことを、単なる気まぐれだと考えてはならない。地球は明確な周期を経て変化し、人間もそれとともに移り変わる。一日に色合いがあるように、一年にもそれぞれの色がある。地球のアストラルな生命力は、クリスマスからイースターの間にかけて若く、力強い。この時期に願いを立てる人は、それを着実に実

神智学の海

著：W・Q・ジャッジ 訳：星野 未来

電子書籍 Kindle 版

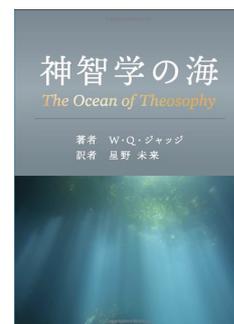
1,000円

POD 版

2,090円

【本書について】

この本は、THE OCEAN OF THEOSOPHY の日本語版です。アメリカの神智学協会の担い手、W・Q・ジャッジが一般の読者に理解できるように神智学の内容を書いた著書です。この度完訳され、本になりました。



現するための力をより得られるだろう。」今、ルシファーはこの言葉を繰り返し、さらにこう付け加える。「誰も、数字の重要性や力——象徴としての——を軽んじてはならない。宇宙のすべてのものは、永遠の比率と数字の組み合わせに従って構築されている。【神は幾何学的する】("God geometrizes" 神は幾何学的に創造する) ののである。数字と数記号(数詞)は、あらゆる神秘主義、哲学、宗教体系の根本的な基盤である。一年の祭りとその日付はすべて、“すべての暦の父”であり黄道帯の支配者である太陽——すなわち太陽神と、十二の偉大でありながらも従属的な神々——に基づいて定められた。そしてそれらは後に、民族や部族の宗教の周期の中で神聖なものとなったのである。」

一年前、編集者たちは「1888年は不吉な数字の組み合わせだ」と述べたが、その後、まさにその通りの年となった。地震や恐ろしい火山の噴火、津波や地滑り、サイクロンや火災、鉄道や海での事故が次々と起こった。天候の面でも、昨年一年はまるで狂気に満ちた、不健康で不気味な年だった。季節は入れ替わり、暦をもてあそび、世界中の气象台を司る賢者たちを嘲笑うかのようだった。ほとんどすべての国が何らかの大きな災厄に見舞われたが、なかでも特に目立ったのはドイツである。1888年は、ドイツ帝国が事実上、統一18年目を迎えた年だったが、この「8」という数字が四つも重なる不吉な年に、ドイツは二人の皇帝を失い、多くの恐ろしいカルマ的な結果の種を蒔くこととなったのである。

1889年という年は、諸国や人々、神智学、そしてルシファーに何をもたらすのだろうか。しかし、未来を覗き見るのは控えた方が賢明かもしれない。それよりも、今や天界を支配する数の軍勢に祈り、私たち、哀れな地上の数字(取るに足らない存在)たちに寛容であってくれるようお願いの方が、なお良いのかもしれない。私たちはどちらを選ぶべきだろうか。ユダヤ人やキリスト教のカバリストにとって、彼らの神——アブラハムとヤコブの神——の数は10であり、それは完全性の数である。宇宙における「一者」、天文学的には太陽、カバラ的には十のセフィロトを意味する。しかし、神々は数多く存在する。日本人によれば、12月は毎年神々が到来し、あるいは降臨する月とされている。ゆえに、私たち人間の

周囲のアストラル空間には、かなりの数の神々が潜んでいるに違いない。1月3日は、クローヴィス以前の時代には、パリの守護女神イシス(今では「生命を生み出す者」聖ジュヌヴィエーヴと名を変えた)を祀る日とされていたが、同時にオリンポスの神々が信者たちを訪れる日でもあった。毎月3日は知恵の女神パラス・アテナに捧げられ、1月4日はメルクリウス(ヘルメス、ブツダ)の日であり、彼は自分に礼儀正しい者の頭に知恵を授けると信じられている。12月と1月は、神々と数字が最も深く結びついた二ヶ月である。私たちは再び問う——どちらを選ぶべきだろうか。「これが問題だ。」*

(* 訳注:「これが問題だ」は、シェイクスピアの戯曲『ハムレット』の有名なセリフ "To be, or not to be: that is the question." (生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ)への言及。)

私たちは今、冬至の時期にいる。太陽が山羊座に入るこの時期、12月21日以降、太陽は南半球での進行をすでに止め、蟹(蟹座)のように後戻りし始める*。毎年まさにこの時期に、太陽は「誕生」するのである。北半球に住む人々にとって、12月25日は太陽の誕生日だった。また、12月25日——すなわちキリスト教徒にとって「世界の救い主」が生まれたとされるクリスマスの日——には、キリストよりもはるか昔に、ペルシャのミトラ、エジプトのオシリス、ギリシャのバックス、フェニキアのアドニス、フリギアのアッティスといった神々も誕生したのである。そして、メンフィスでは人々に揺りかごから取り出された神の像が示された一方、ローマ人は12月25日を「不敗の太陽神の誕生日 (natalis solis invicti)」として暦に記していた。

(* 訳注:原文の「cancer or crablike」は、「蟹座 Cancer」または「蟹のように」という意味である。ここでの「cancer」はラテン語で「蟹」を意味し、同時に黄道十二宮の「蟹座 Cancer」も指す。この表現は、太陽が南下を止めて北上し始める様子を、「蟹が後ずさりするように」進路を変えることになぞらえている。西洋の占星術や神話では、蟹は後ろ向きに歩く動物として知ら

れており、太陽の動きが一旦止まり、逆方向に動き出す様子を象徴的に表現している。)

人間の運命に対する哀しい嘲笑だ。これほど多くの救世主がこの世に生まれ、幾度となく世界のために祈りや供物が捧げられてきたというのに、世界は今なお惨めなまま——いや、かつてよりもはるかに悲惨になっている。まるで、これらの救世主が一人も生まれなかったかのよう！

一月——それは、時の神ヤヌスに捧げられた月、「ヤヌアリウス」(Januarius)だ。ヤヌスは永遠に巡る時の循環を象徴し、二つの顔を持つ神である。その一つは東、もう一つは西——すなわち過去と未来を見つめている。私たちは彼をなだめ、祈るべきだろうか？なぜそうしないのか？彼の像の足元には十二の祭壇があり、それは黄道十二宮、十二の偉大な神々、太陽暦の十二か月、そして太陽であるキリストの十二使徒を象徴している。ドミニヌス(Dominus)は、古代人が太陽に与えた称号であり、そこから「主の日」「太陽の日」を意味する“dies domini, dies solis”、すなわち「日曜日」が生まれた。ローマ・カトリック教徒はクリスマスの日「Puer nobis nascitur dominus dominorum (われらのために主の主が生まれた)」と歌う。ヤヌス＝一月の像の右手には300、左手には65という、太陽暦の日数を示す数字が刻まれていた。片手には笏、もう片手には鍵を持ち、そこから「ヤニトル(門番)」——天の門を守り、年の初めにその扉を開く者——と呼ばれた。古代ローマの硬貨には、片面に二面神ヤヌス、もう片面に船が描かれている。

私たちは彼の中に、天上の船の漁師であり、楽園の門番、そしてその門の鍵を唯一握る者としてのペテロの原型を見てよいのではないだろうか。ヤヌスは四季を司り、ペテロは四福音書記者を司る。秘教において、数字や数詞の力と意味は、その正しい適用と順列にある。もし私たちが何らかの神秘的な数字に働きかけなければならないとしたら、それはまさにヤヌス＝ペテロに、彼と「唯一なるもの」——すなわち太陽——との関係において願いをかけるべきだろう。さて、ルシファー誌とその仲間たちが、1889年にこの存在(ヤヌスつまりペテロ)から求めるべき最良のものとは何だろうか。私たちの共通の願いは多い。なぜなら、真実の愛の道を歩む私たち

の旅路は、決して平坦ではないからである。

このようにして、私たちは大都会の永遠の霧の彼方、常に隠れ続けるあの輝ける天体に語りかける。来たる年には、1888年に与えてくれた以上の光と暖かさを、もう少しだけ分け与えてほしいと願いながら。同時に、ルシファーとサタンは同一であるという奇妙な思い込みから、ルシファーをボイコットし続けている人々の、同じように曇った頭にも、少しばかりの光を注いでほしいと懇願するかもしれない。おお、ヒュペリオンの子ヘリオスよ、どうか私たちにもっと光を注いでください！あなたが最も輝かしい光を与えるのは、アポロンの伝説のように、善良で親切な人々であるに違いない。ああ、私たちにとってはなんと悲しいことでしょう。この私たちの周期のうちに、ブリテン島がヘリオスと、その神、そしてオーケアニデス・ペルセイスの子どもたちの住むアイア島に変わることは、決してないのだから。これが、私たちの心が年を追うごとに冷たくなり、人類の苦しみに無関心になっていき、大勢の魂がまるで氷柱のようになっていく理由なのではないでしょうか？どうか、この貧しく震える魂たちに、あなたの輝きを注いでください。

これこそが、私たちの光の担い手であるルシファーの、熱烈に表明された願いである。それでは、神智学協会全体、そして特にその活動会員たちの願いとは何だろうか。私たちは、祈りを捧げることを提案する。兄弟たちよ、至高なる唯一の主(あるいはソル)に、私たちの神智学の教えが厚かましく歪められることから救ってくださいよう祈ろう。1889年、かつて私たちを救ってくださったように、自らを「太陽のアデプト」と称する偽りの司祭たちや、その太陽に心を奪われた信奉者たちからも、私たちをお守りくださいますように。まことに「人は苦難のために生まれる」のであり、私たちの忍耐も、もはや限界に近づいているのだから！

しかし、「怒りは愚か者を殺す」と言われている。そして「妬みは愚かな者を滅ぼす」ことも私たちは知っている。だからこそ、私たちのパロディを続ける者たちが年々増えても、長い間誰もそれに注意を払わなかった。彼らは私たちの著作を盗用し、偽の魔術学校を設立しては、聖なる名を用いて真理を求める人々を欺き、さまざま手段で金銭を得るために神聖な科学を悪用し、冒涇

した。たとえば、普通の家具職人がせいぜい 1 ポンドで作る品を「魔法の鏡」と称して 15 ポンドで売る、といった具合である。彼らにとっては、他の詐欺師や占い師、自称「アデプト」たちと同様、神智学の神聖な科学も、カバラ的に読めば「ドル・ソフィア」——金儲けの智慧——と化していた。極めつけは、彼らが「神智学のマハトマに失望した」とする「目覚めた」人々すべてに対し、真のアデプトの資格を、実に寛大な形で提供すると申し出たことであった。しかし残念ながら、その「資格」も、結局は貧しく無責任な霊媒師、あるいはそれ以上に悪質な者に行き着くことが判明し、その一派はついに消滅した。ある晴れた朝、彼らは跡形もなく姿を消し、残された落胆した弟子たちは、今度こそ完全に「目覚め」、悲しい現実を痛感した。つまり、オカルトの知恵は何一つ得られなかった一方で、懐^{ふところ}からはポンドやシリングが大いに消えていたのである。彼らの「脱出」の後、しばしの静けさが訪れた。しかし今、同じことが別の場所で繰り返されているのである。

『イシス・アンヴェイルド』や『セオソフィスト』誌から借用された長大な形而上学的論文は、あるスコットランドの新聞から突然姿を消した。しかし、ヨーロッパから消えたそれらの記事は、アメリカで再び現れた。1887 年 8 月、ニューヨークの『道』誌は、ボストンで出版された『関を越える隠された道』* に対して厳しく批判し、「盗品」として即座に糾弾した。同誌はこの大仰な書物について、「著者が自ら書いたのではなく、写したものだ」とし、こう述べている：「その中で新しいものは真実ではなく、真実なものは新しくない。600 ページにわたり、ヴェーダ、パラケルスス、『イシス・アンヴェイルド』、『道』などからの大規模な盗用が散見される」。さまざまな著者、主に神智学関係の著作から、「逐語的に、あるいは些細な変更を加えて」長文やページ全体を無断で流用したこの行為——そのリストは『道』誌（1887 年 8 月号、159-160 頁参照）に掲載されている——は、本来ならそのまま放置されていたかもしれないが、我々の哀れな模倣者たちがよく使う手口があったため、そうはならなかった。同誌編集者の言葉を借りれば——

……この本は、生きている者も死んだ者も含む偉大なアデプトたちの靈感によるものだと主張されている。彼

らは慈悲深くも心を動かされ、この 600 ページに及ぶ内容を世に出すことに同意したが、ある制約が課されており、不運にも進歩の遅れた [神智学の] 著者たちが書いた以上の詳細や説明は一切許されないという。アデプトたちは、その著者たちの著作から、彼らの謙虚な弟子であるストリート氏に盗用を許したか、あるいは指示したというのである。

* [著者は J・C・ストリート (A. B. N.)、本書は 1887 年にボストンの Lee & Shepard 社より出版された。『道』誌からの最後の引用の斜体は HPB によるもの。—編注]

現代の神智学文献が登場する以前、こうした人々の口にのぼるのは「霊」や「コントロール」ばかりだった。今では、生きて「アデプト」があらゆる形で持ち出され、ここでもあそこでも、常にアデプト、秘儀の司祭（ヒエロファント）が話題にされている。そして、これは 1884 年に神智学が復興し、アメリカに広まってからのことだという点に注意してほしい。マドラスとケンブリッジの間で神智学協会に対する大きな陰謀が企てられ、それがこの運動に新たな勢いを与えた後のことなのだ。その年までは、スピリチュアリスト、特に職業的な霊媒師たちは、自分たちの「コントロール」や「ガイド」を持ち出しては、「アデプト」たちを激しく非難し、その「仮定された力」を嘲笑するのに、これ以上ないほどの罵倒の言葉を浴びせていた。しかし、S.P.R.（心霊現象研究協会）が神智学的現象からスピリチュアリズムの現象へと関心を移した、いわば「ヘロデ王による幼子虐殺」事件の後には、ほとんどの「愛すべき故人」たちは逃げ出してしまった。今や「夏の国（サマーランド）」の天使たちも時代遅れになりつつあり、スピリチュアリストたちもより賢明になり、見極めるようになってきている。しかし、「アデプト」という概念、あるいはむしろ彼らの哲学が広まり始めたからといって、あらゆる種類の偽者たちが、文法もままならない著作の中で神智学の書物から教えや表現、サンسكريット語を盗用したり、あるいは今度はそれを、自分たちが我々の師たちよりもはるかに高貴で偉大だと考える他の「秘儀の司祭」から授かったものだと人々に信じ込ませようとしたりするの

は、決して正当化されるものではない。

この問題の本当の害悪は、神智学の真理がこうした盲目的な教師たちによって取り入れられていること自体ではない。なぜなら、世界をその深刻な物質主義から引き離すほど強力な理想が、どのような手段であれ広まることは、私たちとしても喜んで歓迎すべきことだからである。問題は、それらの真理が誤った主張や荒唐無稽な説とあまりにも深く絡み合ってしまう、麦と稗穀を分けることができず、現代思想に計り知れない善の可能性をもたらしつつあるこの運動が、嘲笑や、場合によってはそれ以上の非難にさらされてしまう点にある。善と悪がこれほど密接に結びついている時、人々はどのようにして善悪を見分けることができるだろうか。「阿羅漢 (アルハット)」「業 (カルマ)」「幻影 (マーヤー)」「涅槃 (ニルヴァーナ)」といった言葉そのものが、無知と傲慢の塊と結びつけて教え込まれた探求者たちを、私たちの門戸から遠ざけてしまうに違いない。ほんの数年前まで、これらのサンスクリット語は彼らにとって未知のものだったし、今でも彼らは意味も理解せず、鸚鵡のように音だけを真似て繰り返しているだけなのだ。それにもかかわらず、彼らはこれらの言葉を愚かな本やパンフレットに詰め込み、自分たちがその足の裏を見ることすら値しない偉大な人々への非難ばかりを書き連ねているのである。

偽貨は本物の金が存在することの最良の証拠ではあるが、それでも偽物は油断した者を欺く。もし神智学協会のこの方面における「主張」が、多くの物質化した霊の同定のように、単なる仮説や感傷的な熱狂に基づくものであったなら、神智学の「マハトマ」たちとその協会は、中途半端な熱意しか持たず、誤った情報を与えられた大衆に助けられた宣教師や疑似科学者たちの聖なる同盟による執拗な攻撃のもと、とっくに宇宙の煙のように消え去っていただろう。しかし、協会が存続しただけでなく、その数と力において三倍も強大になったという事実は、その本質的な価値を改めて証明している。さらに、協会は実践的かつ現実的な知恵も得た。それは、偉大なキリスト教の「マハトマ」の口を通して、「豚に真珠を投げ与えるな」「古い革袋に新しいぶどう酒を入れるな」と教えられるような知恵である。

それゆえ、私たちもまた、心からの祈願

(conjunction 祈りの古称)を唱え、現存する力の助け*(訳注)を呼び求めよう。再びルシファー誌における嘆かましい「作り話」を暴かねばならないという苦しい必要から、私たちを救ってもらうために。神智学の友人や読者の皆さんを招集するため、神智学のアンジェラス(祈りの鐘)を三度鳴らそう。もし私たちが天上の太陽の注意を引きたいのなら、古代人が行い、ローマ・カトリックのアンジェラスの起源ともなった儀式を繰り返さなければならない。最初の鐘は昼の到来を告げ、初期キリスト教徒にとっては朝の使者ガブリエルの出現を、彼らの先人にとっては明けの明星ルシファーの出現を意味した。二度目の鐘は正午に鳴り、天の王である太陽の栄光と高貴な地位を称えた。三度目の鐘は夜の訪れを告げる。夜は昼の母であり、処女、イシス=マリア、あるいは月として讃えられた。こうして定められた務めを果たした私たちは、嘆きの言葉を口にす——

おお、ソル(太陽)よ、黄金の髪を持つ神よ、あなたの司祭を気取る大西洋を越えた霊媒たちに、どうかその燃えるまなざしを向けてください! 見よ、彼らは叡智の杯を受けるに値しない脳でありながら、ペテン師の壇上に立ち、瓶詰め智慧やパラケルススのホムンクルスを売りつけ、大きく口を開けた者たちに、それこそが真のアムリタの霊薬、不死の水であると断言しています! ああ、輝ける主よ、あなたが昇る地の体系を、厚かましくも盗み、偶像を打ち壊す者たちを、あなたは見ておられないのですか? 彼らの傲慢な自慢を聞いてください——「我々は人を作る科学を教えるのだ」と! 日本のお守りやタロットカードといった、下品な二重底のある品々を売りさばく儲け話がヨーロッパで絶たれるや、東洋の古き叡智は今や見捨てられました。彼らの言によれば、中国、日本、古代インド、さらにはスウェーデンボルグ派の「失われた言葉の地」でさえ、もはや真の達人を生み出さない不毛の地となったのです。今や全能のドルの国アメリカこそが、突然その胎を開き、完成された秘儀の司祭を生み出し、「目覚めた者」を招いているのです。なんと驚くべきこと! しかし、もしそうなら、偉大なる太陽よ、なぜあなたの自称司祭たちは、今なお謎めいた「ドヴィジャ(二度生まれ)」——それはマヌの地でしか生まれ得ない存在——を誘い文句に使い

続けるのでしょうか？ また、スーリヤ・ヴィカルタナよ、あなたの偽りの傲慢なしもべたちは、もし本当に「国産」(“home-made”)の達人であるなら当然アングロサクソンやケルト・ゲルマン系の名前を誇るはずなのに、なぜ彼らはアイルランド系の姓を、彼ら自身が「衰え果て不毛で民族が減びつつある」と言う国の名前に変えるのでしょうか？ 太陽の魔術師たちのささやかな主張を吊るすための杭として、大いなる中心地 ** (訳注) でまた別のヒンドゥー名が見つかったのでしょうか？ ああ主よ、彼らは真実を偽り、嘘をつくために羽ペンのように舌を曲げています。しかし——「偽りの預言者たちは風となる。彼らの中に言葉はないのだから」。

* (訳注) 「and invoke the help of the powers that be,」の部分、直訳では「現存する権力 (または力) の助けを呼び求める」となるが、英語の "the powers that be" には「この世を支配する見えざる力」「高次の存在」「神仏や運命、天の力」など、文脈によって幅広い意味合いがある。本訳では、神智学的・宗教的なニュアンスを踏まえ、「現存する力」と意識した。

** (訳注) 「the Great Hub」は、19 世紀アメリカで特にボストンを指す愛称として用いられた表現である。ボストンは当時「the Hub of the Universe (宇宙の中心)」とも呼ばれ、文化や学問の中心地と見なされていた。こ

の文脈では、アメリカ、特にボストンのような都市を「精神世界の新たな中心地」と皮肉を込めて表現している。

敢えて行い、意志を持ち、成し遂げ、沈黙を守る——これこそが、真のオカルティストのモットーである。それは、第五人種の最初のアデプトから最後の薔薇十字会員に至るまで変わらない。真のオカルティズム、すなわち本物のラージャヨーガの力は、ビーチャム錠やピアーズ石鹸のように、日刊紙や月刊誌で大げさに誇示されたり宣伝されたりするものではない。「自分を賢いと思う者には災いあれ。賢者は恐れて沈黙するが、愚者は自らの愚かさをさらけ出す。」

最後に、アメリカの神智学の兄弟姉妹たちが「太陽の火」に飛び込む危険を冒す前に、どうか立ち止まってよく考えてほしい。そして何よりも、真の秘教的知識は決して金で買えるものではないことを心に留めておいてほしい。もし何かを教える者が、ペテロがシモンに言ったように、知識と引き換えに金銭を差し出す者に対して「あなたの金はあなたと共に滅びよ。あなたは (私たちの内なる) 神の賜物が金で買えると思ったのか」と言わないのであれば、その者は黒魔術師か詐欺師である。これが、1889 年に『ルシファー』誌が読者に教えた最初の教訓である。

『神智学の鍵』

著：H・P・ブラヴァツキー
訳：田中 恵美子

電子書籍 Kindle 版
定価 1000 円

神智学の



【本書について】

本書は、H・P・ブラヴァツキーによって1889年に出版されました。それは、大著『シークレット・ドクトリン』の翌年のことであり、たいへん難しい神智学の内容を入門者向けに解説することと、当時様々な批判にさらされていた神智学協会と彼女自身の風評に反論するために書かれました。ブラヴァツキー自身の手による神智学入門書です。

シークレット・ドクトリン II 人間生成論 ⑪

著：H・P・ブラヴァツキー

訳：星野未来

(つづき)

※カッコ内の三桁の数字は脚注です

15. 未来の人類 (202)(a) の七つの影 (201) が七回 (203) 生まれ、それぞれが独自の色 (204) と種類 (b) を持っていた。それぞれ (205) は父より劣っていた。(206) 骨のない父たちは、骨のある存在に命を与えることができなかった。彼らの子孫はブータ (207) であり、形態も心も持たなかった。それゆえ、彼らはチャーヤ (208) 人種 (c) と呼ばれる。

(a) 既に述べたように、マヌは「考える」を意味する語根「マン」から来ており、したがって「考える人」を意味する。このサンスクリット語から、ラテン語の「メンズ」(mens 心)、エジプト語の「メネス」(Menes「マスター・マインド」)、ピタゴラスの「モナス」(monas 意識的な「思考単位」)、そして人間の第五の原理である「マナス」(マインド 知性) が生まれた可能性が非常に高い。したがって、これらの影は「アマナサ」(Amānasa 無心) と呼ばれる。

ブラフマンにとって、ピトリスは非常に神聖な存在である。なぜなら、彼らは人類の祖先 (209) であり、この地球上の最初のマヌシャ (神々) だからである。ブラフマンは、息子が生まれると、ピトリに供物を捧げる。ピトリは神々への崇拜よりも尊ばれ、その儀式は神々への崇拜よりも重要である。(210)

私たちは今、この二重の「祖先」の集団に哲学的な意味を見出せないだろうか？

ピトリスは七つの階級に分けられており、ここでもまた神秘的な数字が現れた。ほとんどすべてのプラーナ文献は、これらのうち三つはアルーパ (形を持たない存在)、

残りの四つは物質的な存在であると一致している。前者は知的かつ霊的な存在であり、後者は物質的で知性を持たない。秘教的な解釈によれば、最初の三つの階級はアスラであり、「夜の身体から生まれた」とされ、残りの四つは「黄昏の身体」から生まれたとされる。ヴァーユ・プラーナによれば、彼らの父である神々は地上で愚か者として生まれる運命にあった。伝説は意図的に混同され、非常に曖昧にされている。ピトリスは、ある伝承では神々の子、別の伝承ではブラフマーの子、さらに別の伝承では自らの父の教師とされている。七つの領域で同時に人間を創造するのは、四つの物質的階級の集団 (軍勢) である。

さて、ピトリスの七つの階級についてであるが、それぞれがさらに七つに細分されている。ここで学徒には一言、そして一般の人々には問いかけをしたいと思う。私たちが明確な根拠に基づいてアグニシュヴァッタと同一視する「火のディーヤニ」の階級は、私たちの学派ではディヤン・チョーハンの身体の「心臓 (ハート)」と呼ばれており、第三人種の人類に転生して彼らを完全な存在にしたと言われている。秘教的な神秘学では、この天使的な「心臓」の七重の本質 (ヘブドマッド的本質) と人間の心臓との間に存在する神秘的な関係について語られている。人間のあらゆる肉体的器官、精神的・霊的な機能は、いわば高次のモデルや原型が地上の次元に反映されたものであり、その写しなのである。なぜ人間の解剖学的構造には、「七」という数の不思議な繰り返しが見られるのであろうか。なぜ心臓には四つの下部の腔と三つの上部の区分があり、それが高次と低次の二つのグループに分かれた人間の七つの原理の区分と奇妙に対応しているのだろうか。そして、なぜ同じような区分が様々なピトリスの階級、特に「火のディーヤニ」にも見られ

るのだろうか。すでに述べたように、これらの存在は四つの物質的（より粗大な）「原理」と、三つの非物質的（より微細な）「原理」、あるいは他の呼び方でもよいが、そうした構成に分けられる。なぜ人体の七つの神経叢は七つの光線を放射するのだろうか。なぜ七つの神経叢が存在し、また人間の皮膚には七つの明確な層があるのだろうか。

解説にはこう記されている。「祖先たちは自らの影を投影して、一つの元素（エレメンタル）（エーテル）から人間を創り出した後、マハーローカへと再び昇る。そして、世界が新たに生まれ変わるたびに、定期的に降りてきて、新しい人間を生み出すのだ。」

微細な体は、スーラ（神々。現在はアスーラ＝非神と呼ばれる者たち）が現れるまで、マナス（理知・知力・知性）を持たないままであった。

「非神」とは、ブラフマンたちにとってはそうかもしれないが、オカルティストにとっては最も高い「呼吸（プラーナ）」である。なぜなら、これらの祖先（ピタラ）たち——形を持たず知性的な存在——は、人間の肉体を作ることは拒み、代わりに人間に心（マインド）を授けたからである。四つの物質的な階級は、人間の身体だけを創造したのだ。

これは、あらゆる宗派のヒンドゥー教徒にとって最高の権威であるリグ・ヴェーダのさまざまな文献に非常に明確に示されている。そこでは「アスラ」は「霊的なもの」「神聖なもの」を意味し、至高の霊の同義語として用いられている。また、「神」という意味でのアスラという語は、ヴァルナやインドラ、そしてとりわけアグニに当てられている。これら三柱は、バラモン神話が古代聖典におけるほとんどすべての本来の意味を歪めてしまう以前には、最も高位の神々とされていた。しかし、その「鍵」は今や失われ、アスラについてはほとんど語られなくなった。

ゼンド・アヴェスターにも同様の記述が見られる。マズダ教、すなわちマジ教において、アスラは「全知の主」アスラ・ヴィシュヴァヴェーダスとして現れる。また、アスラ・マズダ（後のアフラ・マズダ）は、ベン＝フェイの示すところによれば、「知性を授ける主」——すなわちアスラ・メダ、アフラ・マズダオ——である。(211)

本書の他の箇所でも、同様に信頼できる根拠に基づき、インド・イランのアスラは常に七重の存在と考えられていたことが示されている。この事実は、前述の「知性を授ける主（たち）」としての七重のアスラというマズダの名と結びつき、アムシャスパンド神群をアスラや、我々の化身であるディヤン・チョーハン、さらにはエロヒム、エジプト・カルデア・その他諸国の七柱の神々とも関連づけているのである。

これらの「神々」が人間を創造することを拒んだのは、表向きの説明にあるように、彼らの誇りがあまりにも強く、その本質である天上の力を地上の子らと分かち合いたくなかったからではなく、すでに示唆された別の理由によるものである。しかし、寓話は果てしない空想にふけり、神学はそれをあらゆる国で利用して、これらの「最初に生まれし者」すなわちロゴスに対する自らの主張を作り上げ、無知で信じやすい人々の心にそれを真実として刷り込んできたのである。(212)

キリスト教だけが、これらの神々を悪魔へと貶めたわけではない。ゾロアスター教や、さらにはバラモン教でさえも、この手法を利用して人々の心を支配してきた。カルデアの顕教においても、創造を拒み、そのためにデミウルゴスに反抗したとされる存在たちは、闇の霊とみなされ非難されている。知的な独立を獲得したスラたちは、知的独立を持たず、盲目的な信仰に基づく無益な儀式的礼拝に生涯を費やすスラたちと戦う——これは今や正統派バラモンたちによって無視されている重要な示唆ですが——そして、前者は即座にアスラと呼ばれるようになる。神々の最初の子（長子）や、マインド生まれの子たち（Mind-born Sons）は、子孫を創造することを拒み、そのためにブラフマーによって人間として生まれるよう呪われる。彼らは地上へ投げ落とされ、地上は後に神学的教義のなかで地獄の領域へと変容していく。アーリマンはオルマズドが創造した牡牛——それは地上の幻の生命の象徴、「悲しみの種」である——を破壊するが、有限の種子が減びることでこそ、不死の植物、すなわち霊的で永遠の生命の植物が芽生え生きるのでいうことを忘れて、アーリマンは敵、対立する力、すなわち悪魔とされてしまう。テュポンは、オシリスが世界に人々を住まわせて苦しみを生み出すのを防ぐため、オシ

リスを十四の断片に切り裂く。そしてテュポンもまた、顕教的な神学において闇の力とされる。しかし、これらはすべて顕教的な外殻にすぎない。こうした外面的な教えの崇拝者たちは、自己意識的な努力によって人々を本来の神性の地位へと導こうとする者たちの努力や自己犠牲を、不服従や反逆の結果だとみなす。そして、まさにこの形態の崇拝者たちこそが、光の天使たちを悪魔へと変えてしまったのである。

しかし、秘教哲学によれば、ディヤーニ、すなわち「知性を備えたアルーパ・ピトリ（三つの階級で構成され、その知性は“形なき息吹”であり、知的 (intellectual) であっても物質的な要素から成るものではない）」の三分の一 (213) は、カルマと進化の法則によって、地球に再生、すなわち転生する運命にあった。(215) これらの中には、他のマンヴァンタラから来たニルマーナカーヤもいた。したがって、すべてのプラーナにおいて、彼らが第三のマンヴァンタラ（すなわち第三根本人種）において、王やリシ、英雄としてこの地球に再び現れる姿が描かれている。この教義はあまりにも哲学的かつ形而上学的であったため、大衆には理解しがたく、すでに述べたように、聖職者たちは迷信的な恐怖を利用して大衆を支配し続けるために、この教義を歪めて伝えたのである。

いわゆる「反逆者」とは、カルマの法則によって苦杯を最後の一滴まで飲み干すことを強いられ、新たに転生せざるを得なかった者たちのことである。こうして彼らは、劣った同胞たちによって投影されたアストラル像を、責任ある思考を持つ存在へと変える役割を担ったのである。中には、必要な資質——すなわちアストラル体——を持たなかったために転生を拒んだ者もいたという。彼らはアルーパ（無形態）であったからだ。また、他の者たちの拒否は、彼らが行った昔、前のマンヴァンタラにおいてアデプトやヨギであったことに由来していた。これもまた一つの謎である。しかし後に、彼らはニルマーナカーヤとして、自らの番を待っていたモナドたちの善と救済のために自己を犠牲にした。もしそうしなければ、これらのモナドは、無責任で動物的な——外見こそ人間であっても——形態のまま、数えきれないほど長い時を過ごさねばならなかったであろう。これはたとえ話であり、寓話の中の寓話かもしれない。その真の意味は、続

く文章を霊的な目で読む者の直感に委ねられている。

彼らの創造者、あるいは祖先、すなわち顕教の伝説において法に従った天使たちは、バルヒシャッド・ピトリ、すなわちピトリ・デヴァータ、つまり物質的な創造の火を持つ存在と同一視されるべきである。彼らは人間のモナドを自らのアストラルな自己で「包む」ことはできたが、自分たちの姿や似姿で人間を創造することはできなかった。「人は我々の一人ようになってはならない」と、より高等な動物の創造を託された創造神たちは言う。(216) 彼らが自らの神聖な本質から人間の姿を作り出したということは、秘教的に言えば、彼ら自身が第一人種となり、その運命と進化を共にしたことを意味している。彼らは、人間の理性と自己意識という花へと燃え広がる神聖な火花を与えることはできなかったし、与えようとしなかった。なぜなら、彼ら自身がそれを持っていなかったからである。この役割は、ギリシャ神話でプロメテウスの名で象徴されるデーヴァの階級——肉体とは無関係だが、純粋に霊的な人間に深く関わる存在——に委ねられていたのである。

創造者たちのそれぞれの階級は、人間に自らが与えるものを授けた。一方は人間の外的な形態を作り、もう一方はその本質を与えた。その本質は、後に個人の努力によって「人間の高次の自己」となっていく。しかし、創造者たちは自分たちのように——すなわち罪がなく、ゆえに完全な存在として——人間を創ることはできなかった。彼らが罪なき存在であったのは、最初のごく淡い、影のような属性の輪郭しか持たず、それらはすべて人間の視点から見れば完璧であり、処女雪のように白く、純粋で、冷たかったからである。闘いなくして功績は生まれぬ。「地の塵」から成る人類は、最初の神聖なる息吹を持つ天使たちによって創造される運命にはなかった。だからこそ、彼らは創造を拒んだと言われており、人間はより物質的な創造者たち (217) によって形態を作られなければならなかった。そして、彼らもまた自分たちの本性に備わるものしか与えることができなかった。永遠の法則に従う純粋な神々は、自らから影のような人間——自分たちよりもわずかに物質的で霊的にも神聖さにも劣る、しかしなお影にすぎない存在——しか投影できなかった。したがって、最初の人類はその祖先の淡い

写しにすぎず、そのエーテル的な性質においてさえ神々の階層（ヒエラルキー）となるには物質的すぎ、またあらゆる否定的（ニルグナ＝「属性のない」「形のない」といった意味）な完全性を備えていたために人間となるには霊的かつ純粹すぎたのである。完全性が真に完全であるためには、不完全性から生まれなければならない。腐敗しないものは、腐敗するものを媒体・基盤・対照として成長しなければならない。絶対の光は絶対の闇であり、その逆もまた然りである。実際、真理の領域には光も闇も存在しない。善と悪は双子であり、空間と時間の産物であって、マーヤーの支配下にある。一方を他方から切り離してしまえば、両者とも消滅してしまう。どちらもそれ自体では存在しない。なぜなら存在するためには、それぞれが他方から生成され、創造されなければならないからである。両者とも知覚の対象となる前に認識され、評価されなければならない。ゆえに、死すべき肉体を持つ人間の心（マインド）の中では両者は分けて考えられるのである。

それでもなお、この幻想的な区別が存在する以上、居住する惑星——とりわけ私たちの地球——を「創造」したり、この地上界で物質を扱うには、より低位の創造天使の階級が必要となる。歴史時代において、この考えを最初に抱き、この理論に基づくさまざまな体系を生み出したのは、哲学的グノーシス主義者たちだった。したがって、彼らの創造論では、「創造主」は常に霊的存在の階層の最下層に位置づけられている。彼らによれば、私たちの地球とその人間を創造した存在は、マーヤー（幻影）的な物質の限界に置かれており、信奉者たちは、教父たちの大なる憤慨をよそに、この地球に存在する（霊的・道徳的にみじめな）人類の創造に責任を負うのは高位の神ではなく、低い階級の天使だけであると教え込まれた。そして、ユダヤ教の神ヤハウエもその低位の階級に降格させたのである。

すべての古代の宇宙創成論には、現代とは異なる人類についての言及が見られる。プラトンは『パイドロス』で「翼を持つ」人類の種族について語り、またアリストファネスは、プラトンの『饗宴』の中で、丸い体を持つ両性具有の人種について述べている。『ピュマンドロス』では、動物界全体が両性具有であったとされている。そ

こには次のように記されている。「巡りが完了し、結び目が解かれると、人間と同様に両性具有であったすべての動物も解き放たれ〔分離され〕た……〔なぜなら、〕原因は地上に結果を生み出さなければならなかったからである。」(219)

再び、古代キチエ族の写本『ポポル・ヴフ』（故ブラッスール・ド・ブルブル神父によって出版）には、最初の人類は「視力に限りがなく、あらゆることを同時に知っていた種族」と記されている。これは人間ではなく、神々の持つ神聖な知識を示している。『シークレット・ドクトリン』は、民衆の想像による避けがたい誇張を正し、古代の象徴に記された事実を伝えている。

(b) これらの「影」は「それぞれが独自の色と種類」を持って生まれ、また「父、すなわち創造主よりも劣る」存在であった。なぜなら、創造主は自らの種において完全な存在だったからである。注釈では、最初の文はこうして生まれた各人類種族の色や肌の色合いを指しているときれる。『ピュマングー』によれば、自然が「天の人」から創造した七人の原初の人間は、いずれも七人の「統治者」——人間を愛し、人間が自分たちの反映であり統合でもある——の性質を受け継いでいる。

北欧神話において、神々の住まうアスガルドやアース神族そのものには、一般的な「神話」の中に、私たちの『シークレット・ドクトリン』に見られるのと同じ神秘的な場所や擬人化が織り込まれていることがわかる。こうした要素は、ヴェーダやプラーナ、ゾロアスター教の聖典、カバラにも見出すことができる。スカンジナビアのアース神族——私たちの世界に先立つ世界の支配者であり、その名が文字通り「世界の柱」や「支え」を意味する彼らは、ギリシャのコスモクラトール（世界の支配者）、ピュマングーに登場する七人の「職人」あるいは統治者、インドの七人のリシやピトリ、カルデアの七柱の神々と七人の悪霊、上位三位一体によって統合されるカバラの七つのセフィロト、さらにはキリスト教神秘主義における七つの惑星霊と本質的に同一である。アース神族は、倒された巨人ユミルの遺骸から大地や海、空、雲、すなわち目に見える世界のすべてを創造するが、人間そのものは創造せず、アスク（トネリコ）の木からその形

態だけを作る。ロドウルが血と骨を与えた後、オーディンが生命と魂を吹き込み、最後にホーニルが知性（マナス）と意識的な感覚を授ける。(220) 北欧神話のアスク、ヘシオドスのアッシュ（トネリコ）の木（そこから青銅時代の第三根本人種が生まれた）、そして『ポポル・ヴフ』のツイテの木（そこからメキシコの第三人種が創造された）は、いずれも同一のものである。これは、どの読者にも明らかだろう。しかし、北欧のユグドラシル、ヒンドゥーのアシュヴァッタ、ゴガルド（Gogard,）、ギリシャの生命の木、チベットのザンプンが、カバラのセフィロトの樹、アフラ・マズダが創った聖なる樹、さらにはエデンの園の木と本質的に同一であるという秘教的な理由を、西洋の学者の中で誰が説明できるだろうか。(221) それでも、ピッパラやハオマ、あるいはもっと身近なリンゴであれ、これらすべての「樹」の果実は、実際に「生命の植物」なのである。人種の原型はすべて、マイクロコスモス（小宇宙）的な樹の中に含まれていたが、その樹は偉大な宇宙的なマクロコスモス（大宇宙）の樹の内部と下層で成長し、発展していったのである。(222) この神秘は、ディルゴタマス（Dilgomas）の書において半ば明かされている。そこにはこう記されている——「ピッパラ、その樹の甘き果実は、科学を愛する霊たちが訪れ、神々があらゆる驚異を生み出す場所である」と。

ゴガルド（Gogard）においてと同様に、これらすべての世俗の樹木の豊かな枝々の間には「蛇」が棲んでいる。しかし、マクロコスモスの樹が永遠の蛇であり、絶対的な智慧そのものであるのに対し、マイクロコスモスの樹に棲む者たちは、顕現した智慧の蛇である。一者は一にして万物であり、他はその反映された部分である。「樹」とはもちろん人間自身を指し、それぞれの人に宿る蛇とは、意識あるマナス、すなわち霊と物質、天と地をつなぐ連結部である。

どこでも同じことだ。「創造する」力は人間を生み出すが、その最終的な目的を達成することには失敗する。これらのロゴスたちは皆、人間に意識ある不死の霊を授けようと努めるが、それは心（マナス）にしか反映されない。彼らはこの試みに失敗し、その失敗のために（あるいは試みそのもののために）罰せられる存在として描かれている。その罰とは何か？ それは、我々の地球—

—その連鎖の中で最下位にある——という下層世界、あるいは冥界への投獄であり、物質の暗闇、または動物的人間の内部で「永遠」（すなわち生命サイクルの期間）を過ごす刑罰である。半ば無知で半ば策略的な教父たちは、この象徴的な表現を歪めることに熱心だった。彼らは、古代のあらゆる宗教に見られる比喩や寓話を巧みに利用し、新しい宗教の利益のために転用した。こうして、人間は物質的な地獄の闇へと変えられ、その内在する原理であるマナス、すなわち化身したデーヴァから得た神聖な意識は、地獄界の燃え盛る炎となり、我々の地球そのものが地獄とみなされた。ピッパラやハオマ、知恵の樹の果実は禁断の果実として非難され、「知恵の蛇」——理性と意識の声——は、長きにわたり墮天使、すなわち古の竜、悪魔と同一視され続けてきたのである。

他の高位の象徴についても同様である。インドで最も神聖かつ神秘的なシンボルであるスヴァスティカ（卐）は、現在フリーメイソンによって「ジャイナ十字」とも呼ばれているが、キリスト教の十字架と直接的な関係、あるいは同一性さえ持ちながら、同じように不名誉なものとしてされてしまった。インドの宣教師たちは、これを「悪魔の印」と教えている。しかし、ヴィシュヌの大蛇、千の頭を持つシェーシャ・アナンタの頭上、ヒンドゥー教の地獄ナラカにあたるパタラの深淵に、この印は輝いていないだろうか。確かに輝いている。だが、アナンタとは何か？ シェーシャとして、それはほぼ無限のマンヴァンタラ（宇宙周期）の時間の輪廻であり、アナンタと呼ばれる時には、永遠の神ヴィシュヌが宇宙の休息期間（ブララヤ）に横たわる七つの頭を持つ大蛇となり、それ自体が無限の時間そのものとなる。サタンがこの高度に形而上学的な象徴と何の関係があるというのか。スヴァスティカは、あらゆるシンボルの中で最も哲学的かつ科学的であり、同時に最も理解しやすいものである。それは、「創造」、あるいはむしろ進化と呼ぶべき全過程を、数本の線で要約したものだ。宇宙神話（コスモセオゴニー）から人類起源論（アントロポゴニー）まで、分割できぬ未知のパラパラフマンから、唯物論科学の小さなモノロン（単細胞生物）に至るまで。その起源は、全能の神自身の起源と同様に、科学にとっても未だ未知である。スヴァスティカは、すべての古代民族の宗教的シンボルの

先頭に掲げられている。それはカルデアの『数の書』における「労働者の槌」であり、『秘儀の書』における火打石（＝空間）から火花を打ち出す「槌」であり、その火花が世界となる。それはまた、ドワーフたちが巨人——すなわち宇宙以前の自然の巨大な力——に対抗するために鍛えた、トールの魔法の武器ミョルニル、「嵐の槌」でもある。これらの力は物質界に生きている間、宇宙の調和をもたらす神々によって鎮められることはなく、まず滅ぼされねばならない。だからこそ、世界は殺されたユミルの遺骸から形成されたのだ。スヴァスティカはミョルニル、「嵐の槌」であり、ゆえに、聖なる神々であるアース神族が、人生における情熱と苦悩の火によって浄化され、永遠の平和が宿るイダに住まうにふさわしくなったとき、ミョルニルはもはや不要となると言われている。それは、死者の国の女神ヘル^{からす}の束縛がもはや彼らを縛らなくなる時、すなわち悪の王国が消え去る時である。

スルトの炎も、幾度もの大洪水の荒れ狂う水も、彼らを滅ぼすことはなかった。そこにいたのは…トールの息子たちだった。彼らはミョルニルを携えていたが、それは戦いの武器としてではなく、新たな天と地を聖別するための槌としてであった。(223)

まことに、その象徴が持つ意味は多岐にわたる。大宇宙（マクロコスモス）の働きにおいて、「創造の槌（Hammer of Creation）」——四本の腕が直角に曲がった形状——は、不可視の力の宇宙（コスモス）における絶え間なき運動と回転を指し示す。顕現した宇宙および我々の地球においては、それは世界の軸および赤道帯が時間の循環（サイクル）の中で回転することを示唆している。二本の線がスヴァスティカ（卍）を形作り、霊と物質を意味し、四つの鉤（フック）は回転する周期における運動を象徴する。小宇宙（ミクロコスモス）である人間に適用するとき、それは人間が天と地を結ぶ存在であることを示す。水平な腕の先端に右手を掲げ、左手は地を指す。ヘルメスの「エメラルド・タブレット（Smaragdine Tablet）」においては、掲げられた右手に「Solve（溶解せよ）」、左手に「Coagula（凝固せよ）」の語が刻まれている。この象徴は、錬金術的、宇宙生成論的、人類学的、魔術的な記号であり、その内奥の意味に

は七つの鍵が存在する。この普遍的かつ示唆に富む複合象徴が、宇宙の七大秘儀への鍵を包含していると言っても過言ではない。初期アリア人の神秘思想に端を発し、彼らによって永遠の門——蛇アナンタの頭上——に置かれたこの象徴は、中世の人間擬人化論者による学問的解釈の中で霊的死を迎えた。それは、純粋な霊から発し、粗大な物質に至るまでの普遍的創造力のアルファでありオメガである。また、神聖および人間的科学の循環の鍵でもある。その全容を理解する者は、偉大なる幻影にして欺瞞者たるマハー・マーヤーの束縛から永遠に解放されるであろう。かつては神聖なる「槌（ハンマー）」の下から放たれた光は、今やフリーメイソンのロッジにおけるグランドマスターの木槌やガバルへと墮落したが、それでもなお、いかなる人為的な策略や虚構の闇をも払拭するに足る輝きを有している。

オーディン^{からす}の鴉たちが、流れる川の下にある水晶の住処で羽ばたきながら、過去と未来を囁く三人の北欧の女神たちの歌は、いかに予言的であることか。その歌はすべて「智慧の巻物」に記されており、多くは失われたが、いくつかは今も残っている。そしてそれらは、詩的な寓意の中に、太古の時代の教えを繰り返している。ワグナー博士の『アスガルドと神々』より人間について要約すれば、人間は天と地をつなぐ環であり、水平に伸ばした腕の先で右手を上げ、左手で大地を指し示しているとされる。ヘルメスのエメラルド板には、上げられた右手に「Solve（溶解）」、左手に「Coagula（凝固）」の語が刻まれている。これは同時に、錬金術的、宇宙生成論的、人類学的、魔術的記号であり、その内的意味には七つの鍵がある。この普遍的で最も示唆に富む複合的象徴は、宇宙の七大秘儀への鍵を内包していると言っても過言ではない。初期アリア人の神秘的観念の中に生まれ、彼らによって永遠の門口、蛇アナンタの頭上に据えられたこの記号は、中世の人間化論者たちの学問的解釈において霊的死を迎えた。それは普遍的創造力のアルファでありオメガであり、純粋な霊から発し、粗大な物質に終わるものである。また、それは科学の循環、すなわち「世界の再生」への鍵でもあり、これは我々の輪廻における第七人種について、過去形で語られた予言である。(つづく)

新時代の共同体 1926 ⑥

アグニヨガ協会

74

緊急の事態を注視する必要がある。個人的な熱意を維持する必要がある。誰もが独立して行動する必要がある。肩に手を置いたり、唇に指を当てたりしてはならない。警備を怠った者は災いがある。盾に米をまいた者は災いがある。兜で水を運んだ者は災いがある。最も悲惨なのは、灰色の恐怖だ。まさに、世界の網が投げかけられた。それを空っぽで引き上げることはできない。まさに、わずかなことも忘れられることはない。種は対価がすでに支払われた。暴力は許されない。皆が行くようにしなさい、しかし、行き着かない者を哀れむ。帰路はどれほど暗いか。隣人の道に踏み込むことほど悪いことは他に知らない。皆に「師の指示があるまで、自分の道を進みなさい」と伝えなさい。海のうねりの音を喜びなさい。この偉大な時代の意味を理解しなさい。杯を持ち上げなさい。私はあなたたちを呼んでいる。

75

確かに、すべての予言が成就するのを待つことができる。期日がいつ変わるかはわからない。出来事の表層について考え、外見がいかにか重要でないかを理解しなさい。内面的な意味だけが答えである。何世代にもわたる種まきが芽吹き始め、穀物が実り始めている。

76

バトルのテクニックのひとつ、「岩を投げ落とす」技を知っておく必要がある。バトルがある程度の緊張状態に達すると、指導者は自分のオーラの一部を引きちぎって敵の大群に投げつける。当然、戦士たちのオーラも激しく引きちぎられるため、このときの防御網は強くないが、敵は特に大きな打撃を受ける。オーラの織物は稲妻

よりも激しく焼き尽くす。我々はそれを「英雄的」と呼ぶ。自分たちが柔らかい列車で旅をしていると思っただけではない。断崖絶壁の上の板の上を歩いているのだ。オーラの切れ端は鷲の翼のようなものである。私たちは援護なしで壁の上を歩いていることを忘れてはならない。割れたガラスはすぐには音を立てないが、谷底まで落ちたとき、破片が音を立てる。あとは自分で理解できるだろう。人類を救うための戦いには、最大の力が注がれている。

77

現象は、目ではなく、意識にとって明白なものとして理解されるべきである。これが、あなた方の理解と我々の理解との違いである。あなた方は現象の結果を事実と呼ぶが、我々は、あなた方には見えない真の事実を見分けることができる。

盲人は雷鳴で稲妻を判断するが、目が見える人は雷鳴を恐れない。このように、真の事実とその結果を見分けることを学ばなければならない。

我々が運命づけられた出来事について話すとき、その真の始まりを見ている。しかし、目に見える結果だけで判断すると、判断が遅れてしまう。我々が「明白な事実」に反して行動せよ」と言うとき、過去の出来事の幻影に惑わされないでほしい、という意味だ。過去と未来を明確に区別しなければならない。まさに、この無関心によって、人類は結果の幻影の中で堂々めぐりしている。

創造的な火花は出来事の現象に秘められているのであって、結果には秘められていない。結果に夢中になっている人類は、雷の音しか感じない盲人のようなものだ。出来事と結果から判断することの違いを想像することができる。

友人たちに、出来事の発生から物事を観察することを

学ぶよう伝えなさい。そうしないと、彼らは悪党が書いた新聞の読者で終わってしまう。

世界の進化に参加したいなら、出来事の発生を捉えるために意識を集中しなさい。期日を間違えた、哀れで、犯罪的で、悲劇的な誤解の例は、数えきれないほどある。

樫の木は地中のドングリから育つが、愚か者はそれにつまずいたときに初めて気づく。多くのつまずきが地殻を汚す。世界の緊張の時、過ちや誤解はもうたくさんだ！

エネルギーを大切に使う方法を理解する必要がある。正しい扉だけが、いかに公益の平安につながるかを理解しなければならない。

78

すべての本には、苛立ちに関する章がなければならない。この獣を家から追い出さなければならない。私は厳格さは歓迎する、決意も同様だ。嘲笑的な冗談を追い出す方法を示す。誰もが困難から抜け出せるよう手助けしなければならない。下品さの芽をすべて摘み取らなければならない。皆に発言の機会を与え、忍耐を学ばせる必要がある。空虚な噂を遮断し、師を誹謗する言葉一つに対して十の言葉で反論する。まさに、師に対する非難には、黙って見過ごしてはならない。母と師、この二つの概念は、すべての書籍で守らなければならない。偉大さの光は、決して消してはならない。

79

宇宙の構築において、奉仕は意識の変化を義務づける。間違いはあるかもしれない。最大の過ちでさえ、その動機が純粹であれば許されるだろう。しかし、その純粹さを測ることができるのは、啓蒙された意識だけである。奉仕の喜びは、意識が拡大して初めて現れる。3年ごとに意識の段階が1つずつ進むことを覚えておきなさい。7年ごとに中枢が更新されるのと同じである。意識の期日は二度と繰り返されることはなく、逃してはならないことを理解しなさい。

偉大な奉仕の道に進もうとする人に、何を犠牲にするつもりなのかと尋ねることは当然である。それとも、彼はただ自分の最も甘い夢を実現することを望んでいるだけなのか？あるいは、わずかな信仰のために、この世の

富を手に入れ、自分の意識に不適切な地位を占めることを望んでいるのか？

意識を拡大する方法をすべて挙げきることは不可能だが、そのすべてに、真実と自己犠牲の意識が込められている。

80

思考の明瞭さを理解し、それを未来に適用することが、行動の粗雑さを避ける方法だ。他の人とは違う方法で進む必要がある。決意の小さな粒も一つひとつが貴重だ。私はあなたがたに大胆さを吹き込みたい。平凡という制服を着るくらいなら、人々に奇異だと思われるほうがましである。私の教えを読む必要がある。休日だけでなく、人生のあらゆる場面でそれを実践するよう努める必要がある。自分に問いかけてみなさい。朝は熱心に努力し、夜はオウムのように口先だけで終わっていいのだろうか？

81

過去と未来の間に賢明に一線を引こう。これまで成し遂げたことをすべて挙げきることは不可能である。むしろ、「昨日は過ぎ去った。新しい朝を迎えることを学ぼう」と言うべきだろう。私たちは皆成長し、その活動も拡大していく。27歳を過ぎれば、もはや若くはない。そして、奉仕という偉業（英雄的行為）を理解することができるようになる。昨日の塵を掘り起こすことは不適切だ。これから新たな一步を踏み出すことを決意しよう。千の目に囲まれて働き始めよう。思考の純粹さと行動の相応性を身につけよう。そうして日々を充実させ、機敏さと決断力に慣れるようにしよう。また、この地球上に、この公益の計画よりも高いものはないことを忘れないようにしよう。人生の教えを理解しよう。モーセが人間の尊厳をもたらしたように、仏陀が意識の拡大を目指したように、キリストが与えることの有用性を教えたように、そして新しい世界が遠い世界を目指しているように！私たちを取り巻く比較対象について考えてみよう。礎石について考えてみよう。与えられたこの道について考えてみよう。宇宙の境界があなたたちとどのように接触しているかを考えてみなさい。本の中ではなく、人生の中で起

こった素晴らしい緊張の歩みを思い出さない。どれほど多くのことが持ち上げられず、受け入れられなかったか、そして私たちは同じ場所に立ち続けていることかを考えてみなさい。だから、過ちに絶望するのではなく、教えのヒエラルキーによって上昇しなさい。

82

新しい段階の始まりの日に、地球から離れ、肉体でより高い世界と交わることを学ぶこの素晴らしい時代を、非難することなく語ろう。

誰も何も奪われてはいない、さあ、霊の食卓に手を伸ばしなさい。物質から霊を確立し、山の輝きにハートが震える様子を覚えておきなさい。

私の言葉は、偉業（英雄的行為）の美しさの中で、あなた方を確固たるものにするだろう。旅立つ前に、行動の指示を残し、再び意識を堅固なものにまとめよう。精神が遠い飛行に戸惑うことがなくなったとき、すでに微細な体を獲得していることは、素晴らしい。だから、地球の表面を動くあらゆる動きを喜ぼう。その動きの中で、私たちは飛ぶことを学んでいるのだ。

飛ぶ——なんて素晴らしい言葉だろう！その中には、すでに私たちの使命の兆しがある。つらいときは、飛翔のことを思いなさい。誰もが翼のことを思うように。勇敢な者たちに、空間のすべての流れを送る！

83

確かに、一つの火災には十の迂回路を準備しておく必要がある。その後十の決断が続く場合、その行動はより強力になる。経験の浅い者には背後に火が必要だが、熟練者はすべての入口を開けておくことができる。敵の剣の曲がり方を理解する能力が必要だ。敵の馬蹄の音が聞こえるときに微笑む能力が必要だ。かがまないように、矢が頭上を飛ぶタイミングがわかるようにしよう。

84

偉大なものを受け入れるのは難しいが、拡大した意識で小さなものを受け入れるのはもっと難しい。小さな現実を大きな理解の範囲に当てはめるのは難しい。大きな剣を小さな鞘に収めるにはどうすればいいだろうか？

試練を経た意識だけが、現実という一粒の価値を理解する。王国は王冠や群衆の中にあるのではなく、思想の宇宙的な広がりにある。このようにして、生命の教えは互いに補い合い、多くの人々を引き寄せる必要はない。

私はあなたがたに、共同体が受け入れられたときに第三の書を与えると述べた。しかし、私たちには多数は必要ではなく、私たちに必要な者たちの意識だけが必要だ。それが、私が第三の書を与える理由であり、それが、我々が真理の事実を繰り返し強調し続け、誕生を祝福することを好み、葬送の行列を受け入れない理由である。

ある人々には教えを耳元で大きく吹き鳴らさなければならず、他の人々にはただ道しるべを置くだけでよい。さらに別の人々には、たとえほんのわずかでも彼らの意識が受け入れられるなら、単純なヒントを与えるだけでよい。では、世界的な意義を持つ一つ一つのかけらを深く理解し、すべてを受け入れることのできる者たちを、教えはどれほど歓迎することだろう！

永劫のひとつひとつの崩壊が、まるごと世界を移動させる。そのため、あなたの思考は思考エネルギーの節約へと促されるのである。

85

すべての生物は、それぞれのエネルギーによって動いているが、その主な志向の正確な方向性を確立する必要がある。

ある日、弟子たちが祝福された方に「所有を放棄するという戒律の履行をどのように理解すればよいのか」と尋ねた。ある弟子はすべての所有物を捨てたが、師は彼に対して所有を非難し続けた。別の弟子は、持ち物に囲まれたままだったが、非難されることはなかった。

師は、進化が法則に従って進むことを願っている。師は、意識を解放した者たちを見分けることができる。

そう言って、祝福された方は、所有について一切考えないよう求めた。なぜなら、放棄は思考の清めであるからだ。清められた経路を通してのみ、基本的な志向が貫徹できるからだ。

86

アクバルが聞いたおとぎ話を思い出そう。

支配者は賢者に尋ねた。「裏切りの巣と忠誠の砦を見分ける方法は？」賢者は、華やかに着飾った騎馬隊を指差し、「それが裏切りの巣だ」と言った。そして、孤独な旅人を指差し、「それが忠誠の砦だ。孤独は決して裏切らないからだ」と言った。その日から、支配者は忠誠者に囲まれるようになった。

師は忠誠のあらゆる程度を受け入れた。私の手は旅人にとって、暗闇の中の火だ。私の盾には、山の静けさがある。私の共同体がいかにか狭いか、知っている、知っている。建設の基礎の現れは、沈黙の中で明らかになる。

物質の理解は、裏切りが不可能な場所でのみ深まることができる。

87

相続に問題が生じた場合は、共同体に、特定の物品の3年間の試用期間を特定の者に付与するよう希望を伝えることができる。そうすることで、相続は、価値のある者たちによる協力関係へと変化する。特別な選挙で選ばれた者に、作業の品質を監督する役割を委任することもできる。

常に試されているという意識を深めることは有益である。なぜなら、人々はまだ試されているという意識のもとで働くことを知らないからだ。その一方で、世界のあらゆる物質は互いに試し合っている。ただし、ここでいう“試す”とは、向上(改善)を意味することを理解しなければならない。

88

我々はいつも非常に小さな形から始める。これは多くの世紀にわたる経験であり、基本的な宇宙の原理だ。固くて分割できない種は、元素の増加をもたらす。しかし、繰り返される揺らぎや鈍感さは、曖昧さ(かすみ、霧)を生む。生命の原理への敏感さは、固い種を節約するように促す。化学者が分割できない物質を大切にすることも同じだ。本当に、進化の必然性によって呼び起こされた建造物は、壊れないものでなければならない。許されたものと、疑いなく与えられたものの違いを理解しなければならない。

89

我々の共同体には、宣言も誓いも必要ない。労働の努力は偽りがなく、義務の現れは決して忘れられない。命を預かることがあり得る場所で多くを語るができるだろうか？そこでは、1時間が最も長い尺度となりうるのである。精神と運動が否定されているとき、時間の可能性を裏切ることができるだろうか？

私たちは臆病さを克服し、螺旋の渦を感じ、その渦の中心で平静さという勇気を持たなければならない。私はこれまで何度も勇気や恐怖に立ち向かうことについて語ってきたが、我々には宇宙的な科学的方法しかないのだ！入るときには、自分の中に恐れがあるのか、勇気がしっかりしているのかをはっきりと認識しなければならない。

弁証法や方法論の詳細はひとつも見えない。我々が知っているのは、必要性の厳しい花々だけだ。そして、不変性の意識の中で我々にまで至らなければならない。

厳しさは冷たさではなく、確固たることは狭量さではない。大空の重力を感じながらも、あなたは宇宙の渦を感じ、遠い世界へと手を伸ばすだろう。世界の存在を感じる感覚を押し付けることはできない。しかし、まさにこの意識によって、私たちは責任ある仕事を引き受け、進化の真の可能性へと自らを運ぶのである。

90

行動の可動性を理解するには、プールの表面をかき乱して、液体の最下層が動かない様子を観察する必要がある。しかしその場合は、同じリズムが屈折することなく底まで届くように、表面を均等にかき乱さなければならない。否定的な力(ネガティブの力)は底まで届かない。なぜなら、そこまで届かせるためには原初の物質を分解しなければならないが、それは否定的な力には不可能なことだからだ。

新しく来た人はよくこう尋ねる：「可動層と反駁不可能な基盤の境界はどこにあるのか？」もちろん、その境界は決まっているわけではないが、屈折の法則は決まっているので、矢は最初に定められた線から逸脱して飛ぶことはできない。

どうやって層の崩壊を防ぐことができるのだろうか？

もちろん、流れを断ち切る堅固な柱を設ける必要がある。私は渦の中心にある精神の軸について言及したが、この構造を覚えておきなさい。なぜなら、遠心運動に囲まれた不屈の意志は、あらゆる動揺に対抗できるからだ。我々の共同体の構造もまた、強力な渦に囲まれた同じような軸を思わせる。それは、結末がすでに定められている戦いに最適な構造である。我々の構造を物質的に理解する必要がある。宇宙の原理がひとつであるのに、なぜ不可解な抽象にこだわる必要があるのか？ 結晶の成長の仕組みは、重力の世界がいかに多様であるかを示している。探求者は、より高い知識へと物質的に進む方法を理解できるだろう。結晶の明快さを愛さない者は、我々のもとへはたどり着けない。純粋な唯一無二さは、形を完成へと導く。子どもに結晶を見せれば、彼は完成を理解するだろう。まさに、共同体の結晶構造が形の完成をもたらすのである。

91

なぜ不器用である必要があるのか？なぜ無知な印象を与える必要があるのか？なぜ私たちの側はいい加減でなければならぬのか？議論があるとき、なぜ私たちののは大声を出さなければならないのか。なぜ私たちの側はしゃべりすぎなければならないのか？ 不必要な汚れは迂回せよ。そうでなければ、我々の共同体の習慣があなたの方の中で強まることはない。

自由の規律（鍛錬）は、我々の共同体を区別する。精神だけでなく、外見の行動の質も鍛えられる。我々の習慣では、悲しみすぎることはない。非難しすぎるのも、私たちの習慣ではない。人々をあまり広い範囲で自分たちの仲間とみなすのは、我々の習慣ではない。長く待つのも我々の習慣ではない。敵は単純なものから複雑なものへと行動するからだ。あなたの友人たちを強化することを考えなさい。

あなた方の住居の空気を清らかに保ち、来る者たちに最善の願いを送り、我々をとっても待ち望みなさい。それぞれの共同体が自分たちの師を待つようにしなさい。なぜなら、共同体と師は一本の柱の両端を成しているからである。日々の些細なことであっても、家の基盤を忘れてはならない。結局のところ、意識の質を変える必要性

に行き着く。そうすれば、移行（変化）は容易になる。

92

恐ろしい手は、忠誠の螺旋に包まれて歩むあなたには届かない。粗い視力でも忠誠の鎧を見ることができれば！しかし、そうすれば人間はもはや低次の意識にはいないだろう。過去世からの教訓は、閉じた目には届かない。まさに、古い意識のままに我々の共同体に近づく者は誰であれ、翼を持たずに深淵の上に取り残されるのである。誇り高ぶって我々のもとに近づこうとする者は皆、オゾンの爆発のように打たれるだろう。それは、我々が打つのではなく、誇り高ぶる者が自分自身を打つのだということを、どう説明すればよいのか。それは、火薬工場に金属製の靴底で入った者が死ぬのと同じだ。靴底に鋼鉄の釘を付ける技術があれば、速い走りができるが、爆発物のある場所では、どの労働者も柔らかい靴を履くことを知っている。そう、飽和した大気には緩衝材が必要なのだ。

祝福された方を例に挙げよう。彼は山へ登る際、その移行を和らげるために時間を割いた。これにより、エネルギーの節約が実現する。まさに、これは唯一許容され、正当な節約だ。そうでなければ、世界間に空洞が形成され、その空洞がどのようなガスで満たされるか、誰にもわからない。エネルギーを節約するようお勧めする。なぜなら、無駄遣いは、琴線（弦）のように、遠くまで響き渡るからだ。私たちが宇宙の市民になる用意があるなら、あらゆる小さなことにおいて宇宙を大切にすることがある。

神智学協会日本ロッジ 勉強会のお知らせ

勉強会を毎月オンラインで行っております。会員の参加費は無料です。勉強会の日程はメールでお知らせしていますが、メールが届いていない会員の方はinfo@theosophy.jpまでご連絡ください。

神智学協会日本ロッジ ご案内

神智学協会日本ロッジは、世界各地に支部を置き活動している神智学協会(The Theosophical Society)国際本部インド・アディヤールの日本支部です。神智学協会日本ロッジは、神智学協会の目的の遂行と神智学協会が提唱する神智学の教えの普及活動を行っています。

神智学協会の目的

- (1) 人種、信条、性別、階級、皮膚の色の相違にとらわれることなく、人類愛の中核となること。
- (2) 比較宗教、比較哲学、比較科学の研究を促進すること。
- (3) 未だ解明されない自然の法則と人間に潜在する能力を調査研究すること。

神智学協会の会員

- (1) 神智学協会日本ロッジの会員は、神智学協会国際本部の会員名簿に登録されます。
- (2) 神智学協会日本ロッジの会員制度は1年ごとの会費納入によって更新されます。
- (3) 神智学協会日本ロッジの会員は、会報誌『テオソフィア』の配布を受けます。

支援基金

神智学協会日本ロッジでは、神智学の教えを普及するために会の活動を支援することを目的として、支援基金を設立し皆様からの募金を募っております。ご支援いただける方は、下記口座にご入金ください。

【銀行振込によるご入金口座】

ゆうちょ銀行 〇〇八支店（ゼロゼロハチ）
口座番号：普通預金98936871
口座名義：神智学協会ニッポン・ロッジ

【他の金融機関からご入金する場合】

ゆうちょ銀行 〇〇八支店（ゼロゼロハチ）
口座番号：普通9893687
口座名義：神智学協会ニッポン・ロッジ

会報誌について

神智学協会日本ロッジの会報誌『テオソフィア』は3ヶ月ごと年4回発行されます。会報誌についてのお問い合わせは、メールにてお願いいたします。【Email】 info@theosophy.jp 【編集部】 岡本

